

小児腎炎の病態病理に関する研究 —まとめ—

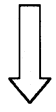
重松 秀一

信州大学医学部病理学教室

この研究班では各種小児腎炎の病態の把握、実験モデルの作製、臨床例あるいは実験モデルによる薬剤その他の腎炎への影響などについて研究を行ってきた。本年度の研究ではIgA腎炎についてさらに新しい情報が追加された。即ち吉本班員は溶連菌細胞膜(SCM)に対する単クローン抗体を用いてIgA腎炎、紫斑病性腎炎患者血清中の抗SCM抗体価について調査しコントロール群との間に差を見出さず、IgA腎炎では溶連菌感染の関与は否定的との結論をえた。柴田班員は小児期各種腎炎患者血清中の腎臓などに対する自己抗体の存在を検討し、小児期発症IgA腎炎の多くに腎や胎盤の抗原に対するIgG、IgM型の自己抗体の存在を証明し、免疫不全の関与の可能性を示唆した。土田班員は10年以上の検診を通じてIgA腎症が学童5.6人(100人/10万人)に毎年みつき、73%が成人にキャリアオーバーされる実態を把握した。実験的IgA腎炎モデルの作製に関しては馬杉班員はddY系マウスに抗タイプIV型コラゲン血清の投与によるメサンギウムIgA沈着型腎炎の発生においてこの自己IgA沈着の促進はメサンギウムの転送機能失調が主因と考えられることを結論としヒトIgA腎炎の成因にこのような非免疫学的事象の関与を示唆した。鈴木班員はコクサッキーB4ウイルスの感染実験によりその接種時期を工夫することにより長期にわたってメサンギウムにIgG、IgA及びウイルス抗原の局在のみられる腎炎の作製に成功した。さらにIgA優位の沈着病変にするために免疫方法、投与方法の工夫が必要と考えられた。ネフローゼ症候群をともなう紫斑病性腎炎について河西班員は6年間の検討結果

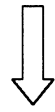
をまとめ血漿交換療法によって血中免疫複合体を陰転化させようが、この治療施行についてはなおいくつかの問題点が残されていると結論した。坂口班員は腎移植の際問題となりつつある片腎状態における糸球体障害について片腎摘出術後5年以上の経過のある22例の剖検例について巣状糸球体硬化病変を検討し、片腎状態での発生率の有意の増加をみとめ、その進行を緩和するいくつかの因子を提示した。

実験モデルを使用しての諸因子の腎炎への影響の検討で山口班員は運動との相関をアミノヌクレオシド・ネフローシスラットにおいて検討した。安静群のラットと運動を自由に行える回転式運動測定器を用いた運動群とでみると運動負荷には蛋白尿の減少と腎機能の亢進を認めたがこの結果が慢性腎炎一般にあてはまるか否かについてはまだいくつかの実験が必要と考えられた。液性免疫抑制効果のすぐれたシクロスポリンAの腎炎治療の有効性について重松班員はラット血清病腎炎の最盛期についてその効果をステロイド剤と比較しつつ検討した結果、シクロスポリンにはステロイド剤にみられる抗炎症作用即ち細胞増多や破壊性病変の抑制はみられなかった。免疫複合体腎炎の完成された時期の治療にはこの薬剤にはその効果は期待できないとの結論をえた。木原班員は種々の実験モデル腎炎について包埋後免疫電顕法を用いて抗原、抗体、補体の結合部位と糸球体細胞外要素との相互関係を調査した。糸球体に沈着する複合体は抗原抗体補体が証明されるが、細胞外成分は含まれず、一方肥厚や硬化は新しい細胞外成分が沈着物を取り囲み増加修復するとの結論をえた。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



小児腎炎の病態病理に関する研究 - まとめ -

重松秀一

信州大学医学部病理学教室

この研究班では各種小児腎炎の病態の把握, 実験モデルの作製, 臨床例あるいは実験モデルによる薬剤その他の腎炎への影響などについて研究を行ってきた。本年度の研究では IgA 腎炎についてさらに新しい情報が附加された。即ち吉本班員は溶連菌細胞膜(SCM)に対する単クローン抗体を用いて IgA 腎炎, 紫斑病性腎炎患者血清中の抗 SCM 抗体価について調査しコントロール群との間に差を見出さず, IgA 腎炎では溶連菌感染の関与は否定的との結論をえた。柴田班員は小児期各種腎炎患者血清中の腎臓などに対する自己抗体の存在を検討し, 小児期発症 IgA 腎炎の多くに腎や胎盤の抗原に対する IgG, IgM 型の自己抗体の存在を証明し, 免疫不全の関与の可能性を示唆した。土田班員は 10 年以上の検診を通じて IgA 腎症が学童 5, 6 人(100 人/10 万人)に毎年みつきり, 73% が成人にキャリアオーバーされる実態を把握した。実験的 IgA 腎炎モデルの作製に関しては馬杉班員は ddY 系マウスに抗タイプ型コラゲン血清の投与によるメサンギウム IgA 沈着型腎炎の発生においてこの自己 IgA 沈着の促進はメサンギウムの転送機能失調が主因と考えられることを結論としヒト IgA 腎炎の成因にこのような非免疫学的事象の関与を示唆した。鈴木班員はコクサッキー B4 ウイルスの感染実験によりその接種時期を工夫することにより長期にわたってメサンギウムに IgG, IgA 及びウイルス抗原の局在のみられる腎炎の作製に成功した。さらに IgA 優位の沈着病変にするために免疫方法, 投与方法の工夫が必要と考えられた。ネフローゼ症候群をともなう紫斑病性腎炎について河西班員は 6 年間の検討結果をまとめ血漿交換療法によって血中免疫複合体を陰転化させうるが, この治療施行についてはなおいくつかの問題点が残されていると結論した。坂口班員は腎移植の際問題となりつつある片腎状態における糸球体障害について片腎摘出術後 5 年以上の経過のある 22 例の剖検例について巣状糸球体硬化病変を検討し, 片腎状態での発生率の有意の増加をみとめ, その進行を緩和するいくつかの因子を提示した。

実験モデルを使用しての諸因子の腎炎への影響の検討で山口班員は運動との相関をアミノヌクレオシド・ネフローシスラットにおいて検討した。安静群のラットと運動を自由に行える回転式運動測定器を用いた運動群とでみると運動負荷には蛋白尿の減少と腎機能の亢進を認めたがこの結果が慢性腎炎一般にあてはまるか否かについてはまだいくつかの実験が必要と考えられた。液性免疫抑制効果のすぐれたシクロスポリン A の腎炎治療の有効性について重松班員はラット血清病腎炎の最盛期についてその効果をステロイド剤と比較しつつ検討した結果, シクロスポリンにはステロイド剤にみられる抗炎症作用即ち細胞増多

や破壊性病変の抑制はみられなかった。免疫複合体腎炎の完成された時期の治療にはこの薬剤にはその効果は期待できないとの結論をえた。木原班員は種々の実験モデル腎炎について包埋後免疫電顕法を用いて抗原,抗体,補体の結合部位と糸球体細胞外要素との相互関係を調査した。糸球体に沈着する複合体は抗原抗体補体が証明されるが,細胞外成分は含まれず,一方肥厚や硬化は新らしい細胞外成分が沈着物を取り囲み増加修復するとの結論をえた。